鎖国期日本への中国陶磁の流通

弦本 美菜子

要旨　本稿では、江戸時代、鎖国期における日本国内への海外産陶磁器の流入について考える。長崎が中国陶磁の入り口として主要なものであったことと、長崎に入ってきた幅広い種類の商品から選択された特定のものが江戸まで運ばれたということを指摘したい。日本が中国・オランダとのみ貿易を行ったこの時期に海外から流入した陶磁器はほとんどが中国製品であり、流入の窓口としては長崎が主なものとして考えられる。長崎と大消費地である江戸の遺跡とで出土した中国陶磁を比較すると、共通するものが多くあることが確認される。江戸時代を通じ長崎と江戸は太いパイプでつながっていたことを実例として示すものである。また沖縄を通して入ってきた中国陶磁と比較すると、中国南部の製品を中心とした沖縄ルートでの流入に対し、景徳鎮窯系の製品を多く含むという長崎ルートの特徴が見て取れる。江戸では景徳鎮窯系の磁器が輸入陶磁器の大部分を占めることから、江戸へ運ばれた中国陶磁は主に長崎から入ってきたものであると推定することができる。江戸と共通する中国陶磁は唐人屋敷跡・オランダ商館跡でも確認されるため、貿易の担い手については中国船・オランダ船の両方が考えられる。長崎で出土するが江戸ではほとんど出土していないものがあることもわかった。江戸で出土した中国陶磁は、特に江戸時代後期には生産地や器種に偏りが見られる一方で、長崎では江戸で少ない福建・広東産の粗製の製品や、他の器種も多数確認された。江戸での偏りは陶磁器が長崎に入った後になされた選別によるものだと判断できる。中国陶磁が江戸へ至る間に働いた選択の背景としては、中国陶磁に付与されたブランド性や、中国陶磁とそれを用いた行為との関係があったことが推察される。江戸での需要に応えたもの以外の中国陶磁が長崎で見られることからは、中国陶磁の日本への流通という面から見た長崎と江戸の性格の違いが看取される。

はじめに

近年、各地で近世遺跡の発掘調査が行われ、各都市間で比較研究ができる量の考古資料が蓄積されている。江戸時代に中国･オランダとの貿易の重要な拠点であった長崎と、国内各地の遺跡では、この時期に外国から輸入された陶磁器が多数出土する。海外産で、貿易により日本に入ってきたこのような陶磁器を貿易陶磁と呼ぶ。鎖国期の貿易陶磁は長崎を通して入ってきたと考えるのは自然なことであるが、長崎を国内流通の起点と位置づけて研究した例はこれまで少ない。本稿は、この視点から長崎をはじめとする経由地を通した日本への陶磁器流入の特徴をとらえることを目指すものである。

1　江戸時代の貿易陶磁に関する研究

東京において近世都市江戸の発掘調査が本格的に行われるようになったのは、1970 年代である。江戸で出土する貿易陶磁については、多量の出土が見られる東京大学構内の遺跡を調査した堀内秀樹氏や鈴木裕子氏らによって、1990 年代から研究が行われている。これまで江戸遺跡における出土状況や様相の紹介、受容の背景の考察等をされている。

また大阪でも城下町跡などで江戸時代の発掘調査が行われ、貿易陶磁を含む多数の遺物が出土している。

長崎では、近世遺跡の考古学的な発掘調査は1980年代に出島や旧市街の一部で始まった。長崎出土の貿易陶磁については出島出土の陶磁器を分析した大橋康二氏が最初に本格的な検討を行った（長崎市教育委員会1986）。調査成果の蓄積を受け、1990年代前半には複数の遺跡を視野に入れた研究が見られるようになる。一例として扇浦正義氏は長崎出土の貿易陶磁について産地別に年代的な変遷を提示した（扇浦1994）。

以上のように江戸・大阪・長崎などの近世遺跡で貿易陶磁が普通に見られることが発掘調査により明らかになった。広い範囲で出土することから、大規模な流通網の存在が想定される。しかし現在までに貿易陶磁の出土が確認された都市でも、流通網の中でその都市がどのような位置づけであったのかなどわかっていないことは多い。長崎について言えば、長崎より先の国内消費地への流通は未だ明らかになっていないようである。複数の都市を比較した研究が少ないことが一因であると考えられる。

本稿ではこの点を踏まえた上で長崎貿易で流入した陶磁器を検討し、鎖国期に長崎がどのような位置づけであったのかを考えたい。

２　鎖国期の貿易と輸入された陶磁器

１）近世における海外との交流

まず対象とする時代の背景を確認する意味で、近世の対外関係について概観しておく。

戦国時代から中国大陸や東南アジアとの貿易はかなり盛んであったが、戦国時代後半から江戸時代初期にかけてはこれに加えてスペイン・ポルトガル・オランダ・イギリス等ヨーロッパの船が日本に来航した。しかし幕府は日本人の海外渡航とスペイン・ポルトガル船の来航を禁止し、唯一の開港地長崎にオランダ商船と中国商船のみの渡来を許可するという制限的な貿易秩序を成立させた。中国では17世紀半ばに明が滅亡し清に代わったが、商船の長崎渡来は続き、中国産の生糸や書籍・薬品・南方産の香木などをもたらし、日本から銀・銅・海産物を持ち帰った。オランダは、バタビア（現インドネシアのジャカルタ）の東インド会社が商船を出島の日本支店に送り交易を行った。オランダは、中国産生糸と絹織物・毛織物・薬品・砂糖・書籍を輸出し、銀・銅を輸入して大きな利益を生み出していた。この他に対馬藩は幕府から朝鮮との外交･貿易を認められていた。1609年には朝鮮と己酉約条を結び、釜山に倭館を設けて貿易船を出した。琉球は1609年に薩摩藩に武力で征服され従属国となったが、他方で中国の冊封を受けて朝貢貿易を行う関係も維持した。北海道では松前氏が徳川家康からアイヌとの交易の独占権を公認された。

以上のとおり江戸時代、海外へ向けて長崎・対馬・薩摩・松前の四つの窓口が開かれていたが、このうち唯一幕府が直轄し、中国船・オランダ船が入港する貿易港が長崎であった。

２）分析の目的・方法

輸入品の国内流通を考えた場合の長崎の特徴を把握するために、本稿では長崎と国内の消費地を出土遺物を手がかりに比較する。

江戸は、堀内氏が指摘するように大消費地であるとともに、海外からの商品の流通を考えた場合に、それより先には大きな市場が存在しないという最終消費地でもある。よって江戸で出土するものは江戸で需要があったものととらえてよい。遺物がさらに先の江戸以外の地に運ばれるためのものであるという可能性を排除できるので、消費地での様相を検討するのに適した地であるといえる。このためここでは国内の消費地を江戸で代表させることとする。海外から国内への流通の窓口である長崎と、消費地江戸とを比較することにより、輸入品の流通という面で国内消費地に対して長崎がどのような位置づけであったのかを考えることにしたい。

具体的には以下の方法で分析を進める。

まず、江戸で出土が報告されている中国陶磁と長崎での出土品とで共通するものがあるか照らし合わせる。長崎から江戸へ至る中国陶磁の流れの有無を確認する。またどちらか一方でしか見られないものがあるか、あるとすればそれはどのようなものか等を確認する。その上で、出土傾向の背景について考察を加える。

３）国内の貿易陶磁の量的推移

本稿で対象とする時期は、外国との貿易が長崎において中国船・オランダ船によるものに限定された 1640 年代以降である。これは中国において明朝が滅び清朝への王朝交代が起こる時期にあたる。17 世紀後半には、これに伴う内乱によって景徳鎮を中心とする磁器生産が疲弊したことに加え、清朝により海禁令が出されたこともあり中国磁器の入手が困難になった。この間その代替品として肥前磁器が広く流通するようになる。

江戸の遺跡において貿易陶磁は、17 世紀前半から中葉にかけて多く出土する。肥前磁器が流通する 17 世紀中葉以降急激に減少し、18 世紀にはほぼ姿を消す。しかし、18 世紀末以降、少ないながらも再び見られるようになり、明治の前半まで出土する。

長崎でも、1571 年に始まる町建てから 17 世紀前半にかけては、出土陶磁器に占める貿易陶磁の割合が 8 ～ 9 割と非常に高い状態が続く。市中では 17 世紀後半に状況が逆転し国産磁器が主体を占めるようになるが、18 世紀後半以降になると貿易陶磁がやや増加する。

江戸と長崎での貿易陶磁の量的な推移は、主要な貿易品としての陶磁器の輸入は 17 世紀前半で終了したことを示している。台湾の鄭氏が滅んだ後、1684 年に海禁令が解かれ、中国船の来航が激増することとなったが、これ以後中国陶磁の流通量は回復することはなかった。このことを考えるならば、中国産の陶磁器の出土量の減少は国産磁器の国内流通をその大きな要因としたほうがよいと鈴木氏は述べている（鈴木 1999）。しかし一方で、その後も少量ながら海外産陶磁器が引き続き出土していることは、江戸時代を通じて取引が続けられたことを示している。

4）国内出土の貿易陶磁の産地

国内の遺跡から出土する貿易陶磁は、中国産のものが大多数を占める。よって本稿では、取り扱う対象を中国陶磁で代表させることとする。

中国陶磁は、生産地により分類されることが多い。生産地は景徳鎮・漳州・徳化・宜興・龍泉などが確認できる。各生産地間では胎土・成形技法・釉調などに違いが見られる。

各生産地と製品の特徴について簡単に述べておく（図 1）。

図 1　中国陶磁の窯跡分布図（山口 2008 より）

景徳鎮は、中国の江西省にある中国最大の窯の一つである。明代に官窯が設けられ、白磁の素地に顔料の呉須で文様を描き透明釉をかけて焼成する青花の技術が発展した。胎土は緻密でシャープな器形を作り出し、焼成も良好で、呉須の発色が鮮やかな、上質な製品が生産されている。

漳州窯は、福建省漳州府平和県などに分布する磁器窯である。製品は 16 世紀から 17 世紀前半にかけてアジア・ヨーロッパなどに大量に流通した。碗・皿類が中心で、軟質で灰色がかった生地に透明感のない釉薬が厚くかけられている、底部に粗い砂粒が付着しているなどの特徴がある。呉州手、呉州赤絵、あるいは主要な積み出し港の名を取ってスワトウ・ウェアと称されるものを含む。

徳化窯はアモイ港の北方、福建省徳化県に分布する宋代から清代までの窯の総称である。白磁のほか、色絵や青花が作られる。胎土は堅緻で、型で作られている。

この他福建・広東地方の窯で作られた磁器に、やや粗雑な作りの一群がある。景徳鎮系と比べて軟質の胎土で、表面には凹凸が、中には気泡が認められる。高台の削りもラフである。呉須の発色は総じて悪く、釉も灰色がかったものが多い。福建・広東省産の製品のうち、漳州・徳化産を除いたものをここでは福建・広東系としておく。

宜興窯は江蘇省太湖の西部に位置する陶器窯である。明末から茶器・文房具・調度品などが生産され、特に小ぶりの急須を作ることで有名になった（東京大学埋蔵文化財調査室 1999、堀内 1999）。

以下でも、遺跡から出土した陶磁器について、生産地にも注意しつつ紹介していく。

3　江戸と長崎の比較

前章では、江戸時代を通じて日本国内で中国陶磁の取引があったことを、おおまかな出土状況から推測した。本章では実際に江戸と長崎出土の中国陶磁を比較した結果を提示する。

江戸の遺物では、明末清初のものでは堀内氏が以前取り上げたいくつかの遺跡のものを中心に、

それ以降のものでは堀内氏らが集成・紹介した清朝陶磁を対象とした（堀内 1991; 堀内・坂野 1996 など）。長崎では唐人屋敷跡・新地唐人荷蔵跡・出島和蘭商館跡をはじめ市中の遺跡の発掘調査報告書に掲載された資料を悉皆的に対象とした。

１）江戸と長崎

江戸と長崎出土の中国陶磁で、共通するものを示した（図 2 ～ 7、表 1・2）。なお、図と写真は各遺跡の発掘調査報告書と堀内氏の論文から抜粋･加工して使用した。表 1 は近世貿易陶磁器調査･研究グループが作成した近世都市江戸の貿易陶磁器資料集を参考に作成した（近世貿易陶磁器調査･研究グループ 2013; 日本貿易陶磁研究会 2013）。長崎に関する表は各遺跡の報告書記載の遺物観察表を参考にした。

中国陶磁が出土した江戸の遺跡で代表的なものについて述べておく。

・東京大学本郷構内の遺跡・御殿下記念館地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）

江戸時代には絵図によって加賀藩上屋敷内の御殿空間またはそれに伴う役所・馬場であったことが知られる。532 号遺構は巨大土坑で、下限は 1650 年頃とされる。碗・中皿等の飲食器が多く認められ、日常的な生活用品の様相を示す。678 号遺構も巨大土坑で、1650 年代から 1670 年代に比定される。大皿類が多く出土しており、日常的に使用された陶磁器群とは考えにくい様相だという（堀内 1991）。

・東京大学本郷構内の遺跡・医学部附属病院中央診療棟地点（東京大学遺跡調査室 1990）

江戸時代にはそのほとんどが加賀藩の支藩である大聖寺藩の上屋敷の敷地内である。L32-1 は地下室であり、1682 年の火災に伴う一括廃棄資料とされる。遺物は上質な磁器が主体を占めており、大名藩邸における行事に使用された道具類であると判断されている（堀内 2006 など）。

・京葉線八丁堀遺跡（京葉線八丁堀遺跡調査会 1990）

徳川家康の入府以来、1635 年の強制的寺院移動命令までは寺町として、その後は武家地や町屋と変遷した。1657 年の明暦の大火以前に使用されたと推定される中国陶磁が多く出土した。

・日本橋一丁目遺跡（日本橋一丁目遺跡調査会 2003）

江戸時代を通じて万町という町屋で、問屋が建ち並んでいたと思われる。17 世紀前半に比定される遺構群で貿易陶磁が一定量認められ、武家地同様の状況がうかがえる。

・千駄ヶ谷五丁目遺跡（千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1997）

1683 年から 1689 年頃にかけて長崎奉行与力・同心屋敷が置かれた。当該期に江戸では一般的に出土しない舶載陶磁が出土した。「長崎土産」の認識のもと、長崎奉行関係者によって江戸へ運ばれたものと推測されている（川口 2012）。

代表的な遺物を紹介する。

・明末清初期の陶磁器

図 2-1 の梅枝文が描かれている小坏は江戸・長崎双方で多く見られ、かなりの量が流通していた

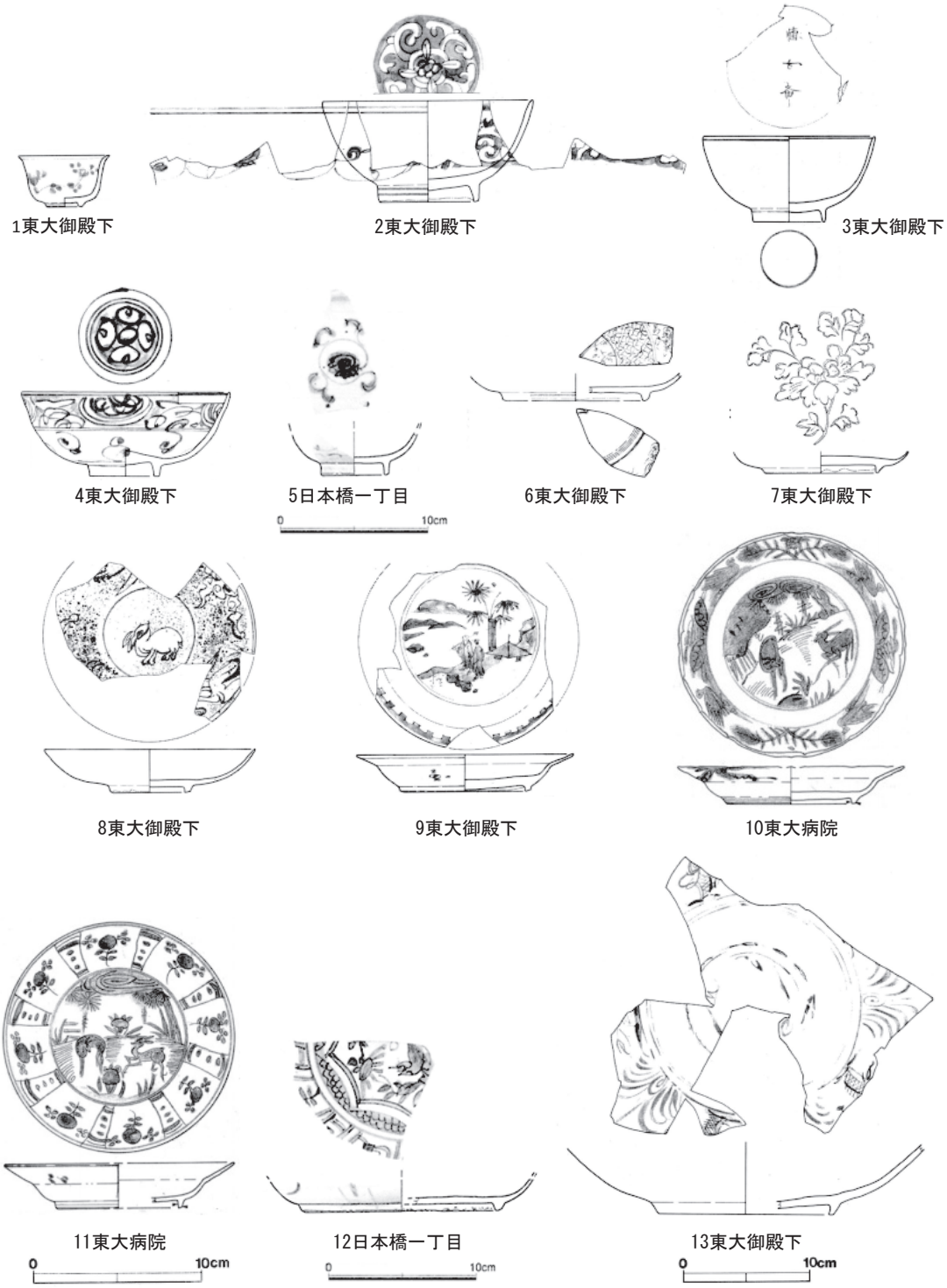
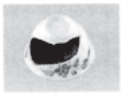


図２　江戸出土中国陶磁（1）

図 3　江戸出土中国陶磁 (2)



28市谷本村町

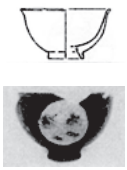
29市谷仲之町西Ⅱ

30荒木町

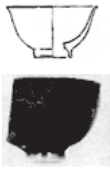
31四谷三丁目

32真砂

33真砂



34本郷追分

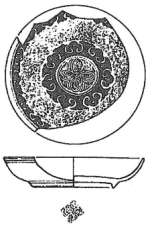


35本郷追分

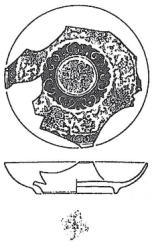
36市谷左内町

37東大御殿下

38真砂Ⅱ



39荒木町Ⅱ

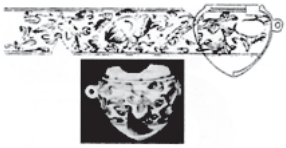


40荒木町Ⅱ

41汐留

42荒木町

43市谷仲之町西Ⅱ



44東大御殿下

45荒木町

図４　江戸出土中国陶磁（3）

表１　江戸出土中国磁器

No.	遺跡	遺跡の性格	出土遺構	器種	施釉	推定生産地	推定廃棄年代	備考
1	東大構内御殿下	大名屋敷	532号遺構	坏	青花	景徳鎮	17-3	
2	東大構内御殿下	大名屋敷	532号遺構	碗	青花	景徳鎮	17-3	
3	東大構内御殿下	大名屋敷	532号遺構	碗	青花	景徳鎮	17-3	「博古斎」
4	東大構内御殿下	大名屋敷	678号遺構	碗	青花	漳州	17-3	
5	日本橋一丁目遺跡	町地	463号遺構	碗	青花	景徳鎮	17-1	
6	東大構内御殿下	大名屋敷	678号遺構	皿	色絵	景徳鎮	17-3	色絵祥瑞
7	東大構内御殿下	大名屋敷	532号遺構	皿	白磁	景徳鎮	17-3	線彫り
8	東大構内御殿下	大名屋敷	532号遺構	皿	青花	景徳鎮	17-3	吹き墨
9	東大構内御殿下	大名屋敷	532号遺構	皿	青花	景徳鎮	17-3	
10	東大構内病院	大名屋敷	L32-1号遺構	皿	青花	景徳鎮	17-4	
11	東大構内病院	大名屋敷	L32-1号遺構	皿	青花	景徳鎮	17-4	芙蓉手
12	日本橋一丁目遺跡	町地	455号遺構	皿	青花	景徳鎮	17-2	芙蓉手
13	東大構内御殿下	大名屋敷	678号遺構	皿	色絵	漳州	17-3	呉州赤絵
14	京葉線八丁堀遺跡	旗本屋敷	48号遺構	盤	瑠璃釉	漳州	17-3	餅花手
15	東大構内病院	大名屋敷	L32-1号遺構	鉢	青花	景徳鎮	17-4	芙蓉手
16	千駄ヶ谷五丁目遺跡	旗本屋敷	0053号遺構	鉢	青花	景徳鎮	17-4	
17	千駄ヶ谷五丁目遺跡	旗本屋敷	0079号遺構	坏	白磁	徳化	17-4	
18	飯倉分館構内遺跡	大名屋敷	300号土坑	碗	青花	景徳鎮	17-4	銘
19	南町遺跡	御家人屋敷	39号遺構	碗	青花	景徳鎮	19-3?	「嘉慶年製」
20	荒木町遺跡Ⅱ	旗本屋敷	340a･b号遺構	碗	青花	景徳鎮	19-1	変形字銘
21	和田倉遺跡	大名屋敷	8号遺構	坏	青花	景徳鎮	19-1	変形字銘
22	白鴎遺跡	大名屋敷	DP4	鉢	青花	景徳鎮	19-1	銘
23	白鴎遺跡	大名屋敷	F5	碗	青花	景徳鎮	19-1	銘
24	鰻縄手	御家人屋敷	133A号遺構	碗	青花	景徳鎮	19-2	銘
25	真砂遺跡	大名屋敷	33号土坑	坏	青花	景徳鎮	19-2	
26	内藤町遺跡	大名屋敷	C-1	坏	青花	福建･広東	19-3	
27	内藤町遺跡	大名屋敷	C-1	坏	青花	福建･広東	19-3	
28	市谷本村町遺跡	大名屋敷	402号遺構	碗	色絵	徳化	18-4	
29	市谷仲之町西遺跡Ⅱ	旗本屋敷	第29号遺構	碗	色絵	徳化	19-3	
30	荒木町遺跡Ⅱ	旗本屋敷	499号遺構	碗	青花	景徳鎮	19-1	変形字銘
31	四谷三丁目遺跡	御家人屋敷	19号遺構	碗	青花	景徳鎮	19-3	「大清嘉慶年製」 蛍手
32	真砂遺跡	大名屋敷	33号土坑	坏	青花	景徳鎮	19-2	「珍玉」
33	真砂遺跡	大名屋敷	33号土坑	坏	青花	景徳鎮	19-2	「玉珍」
34	本郷追分	旗本屋敷	1号大型土坑	坏	色絵	景徳鎮	19-1	瑠璃地金彩 十錦手
35	本郷追分	旗本屋敷	1号大型土坑	坏	瑠璃釉	景徳鎮	19-1	十錦手
36	市谷左内町遺跡Ⅰ	旗本屋敷	118号遺構	碗	青花	景徳鎮	19-3	
37	東大構内御殿下	大名屋敷	7号遺構	坏	青花	景徳鎮	19-4	
38	真砂遺跡Ⅱ	旗本屋敷	12号遺構	皿	青花	景徳鎮	19-1	銘
39	荒木町遺跡Ⅱ	旗本屋敷	642号遺構	皿	青花	景徳鎮	19-3	「大清嘉慶年製」
40	荒木町遺跡Ⅱ	旗本屋敷	642号遺構	皿	青花	景徳鎮	19-3	「大清嘉慶年製」
41	汐留(都埋文)	大名屋敷	6J－033	皿	色絵	景徳鎮	19-3	銘 十錦手
42	荒木町遺跡Ⅱ	旗本屋敷	499号遺構	散蓮華	青花	景徳鎮	19-1	
43	市谷仲之町西遺跡Ⅱ	旗本屋敷	94号遺構	散蓮華	青花	景徳鎮	19-3	
44	東大構内御殿下	大名屋敷	49号遺構	餌入れ	青花	景徳鎮	19-2	
45	荒木町遺跡Ⅱ	旗本屋敷	430号遺構	薬瓶	青花	景徳鎮	19-3	「朝陽堂」

と考えられる。2 は類似品がヴィッテレウ号引き上げ品中に認められる。ヴィッテレウ号は 1613 年に大西洋セントヘレナ島付近で沈没したオランダ東インド会社に所属する貿易船で、ヨーロッパに運ばれる品物を積んだ船であるとされる。3 は見込みに明の天啓年間（1621 ～ 27 年）に施されるとされる「博古斎」銘が入る。4 は漳州窯産であり、やや軟質の胎土で粗雑な作りをしている。同手がヴィッテレウ号引き上げ品中に認められる。6 は、いわゆる「祥瑞手」であり、青花と赤・緑・黒の色絵で文様を描く。1620 年代から 1640 年代のもので高級品である。8 ～ 12 は、17 世紀前半の景徳鎮の青花皿。特に 11 の芙蓉手の鹿文様のパターンは多く、類例がヴィッテレウ号引き上げ品中にも認められる。12 は窓絵に花鳥文が描かれる芙蓉手皿で、肥前有田でこの写しが製作された。13 はスワトウ・ウェアと呼ばれる漳州窯の色絵大皿。長崎市中では、16 世紀末から 17 世紀前半の遺跡において出土例が知られる。この 17 世紀前半に比定される景徳鎮窯と漳州窯の皿は、平戸オランダ商館の発掘調査においてもまとまった出土例が報告され、初期のオランダによる中国陶磁貿易の様相を示す例の一つである。図 3-14 は餅花手と呼ばれる瑠璃釉に白花が描かれる盤。スワトウ・ウェアと同時期・同地域の資料である。15 は芙蓉手の大鉢で上手の製品である。

・清朝期の陶磁器

16 の鉢は千駄ヶ谷五丁目遺跡、長崎奉行所（立山役所）跡に隣接する岩原目付屋敷跡の他、出島や、1690 年頃にベトナム南部のコンダオ島沖で沈んだ中国のジャンク船ブンタオ・カーゴ引き上げ品にも見られる。本来海外向けの製品が江戸へ運ばれた特殊な例である。19・20 は花唐草文が描かれた典型的な意匠の青花である。長佐古真也氏は、清朝磁器で江戸の複数の遺跡から数十以上の類例が求められるものを頻出類型と認め提示した（長佐古 2013）。そのうちの A 群にあたる。21 ～ 27 は仙芝祝寿文またはそれが簡略化された文様が描かれる製品であり、長崎市中でも出土例が多い。頻出類型 B 群である。18 世紀末以降国内でも同様の文様の製品が作られた。図 4-28・29 は 18 世紀後半から 19 世紀前半の徳化窯の色絵碗。量産され、長崎市中にも出土例が見られる。頻出類型 D 群である。34 は赤絵に金彩を施す。35 は瑠璃釉に金彩で雲龍文を描く。41 は色絵小皿。十客組の食器である十錦手の中の一部である。碗・杯は頻出類型 C 群とされる。42・43 は散蓮華で、頻出類型 F 群である。45 は磁器の小瓶である。文字が染め付けられており、薬店名や薬種名と思われる記載から薬瓶であるとされる（堀内 2010）。頻出類型 E 群である。

２）長崎

この他に長崎で出土したものを示した（図 8・9、表 3）。中国陶磁が多く出土した遺跡について紹介する。

・唐人屋敷跡（長崎市教育委員会 2001b, 2003c）

唐人屋敷の出土遺物としては全体量の約 8 割が中国製品である。中国陶磁は、食器の他の生活用品、たとえば灯火具や貯蔵具などにも見られることから、基本的には舶載してきた日常用品を持ち込んで生活していたことが推測される。食器は、素描による鳳凰文（図 8-3 ～ 5）や雲龍文（6 ～ 8）、

梵字文など同じモチーフの文様を施した碗・小皿・中皿が目立ち、大碗の出土も比較的多い。宜興窯の急須や、煎茶用磁器碗も出土している。また運搬貯蔵容器である陶器は中国南部地域の叩き目が施された褐釉壺（14）や褐緑釉壺（15）が多く出土している。酒などの液体を搬入する際の容器と推測されるが、その用を終えた後も、整地の材料などに転用されていたことが確認された。出土品のほとんどは中国人が使用したものと考えられるが、日本の遺跡と共通して見られるものもあり、中国人がそれを運んだと推定する根拠となりうる。

・新地唐人荷蔵跡（長崎市教育委員会 1996a）

新地唐人荷蔵は中国船荷物などの保管場所であったが、出土遺物は石垣内からは少量であり、多くは護岸石垣の外側からのものである。中国陶磁では景徳鎮系や福建･広東系のものが主体であり、徳化窯産の製品も少なからず混在する。1702 年の築造当時の盛土層からは印青花の碗（図 9-16）が出土した。福建・広東系で印版装飾技法を用いた製品である。また石垣外から安平壺（17）が出土した。17 世紀を主体に中国の福建省あたりで生産された粗製白磁の壺である。名称は台湾の安平周辺で多く発見されることに由来するが、東南アジアを中心に広く分布しているとされる。

・出島和蘭商館跡（長崎市教育委員会 1986, 2000, 2001a, 2002b, 2003b, 2008, 2010）

出島の出土遺物は、他には見られない多様な地域から運ばれたものである。オランダをはじめとするヨーロッパ産の陶磁器やガラス製品、クレイパイプも出土している。中国・東南アジア・イスラム産の陶磁器もあり、明らかに輸出用と見られる国産の陶磁器も多く出土している。

18 ～ 23 は景徳鎮産の磁器である。外面に褐色釉が掛けられたバタビアン・ウェア[1]と呼ばれるカップ＆ソーサー（19・20）、中央に唐人や草花文を描く皿（21・22）、上面全体に花唐草文が描かれる大皿（23）などは 17 世紀後半から 18 世紀前半に製作された代表的な磁器である。同様の磁器は、オランダでテーブルのセッティングや室内装飾に使用されたことがわかっており、ヨーロッパ向けに製作されたものとされる。出島で見つかったこれらの中国磁器は商館員が使用していたと考えられている（山口 2008）。その他には日本の他の遺跡と共通する陶磁器も多く、商館員の使用に供したものか貿易商品であったのか判断できないものもある。中国南部で焼かれた壺類（26）も容器として持ち込まれている。

長崎市中

・築町遺跡（長崎市教育委員会 1997）

1571 年に町建てされた六町の一つである島原町の南側崖下に位置し、地租免除の内町に属していた。井戸や屋敷の基礎石などの他に、1663 年の寛文の大火に伴う焼土層が確認され、当時の生活用具類が一括埋蔵された状態で発見された。

・興善町遺跡（長崎市教育委員会 1999）

内町の一つである新町の一角にあたる。18 世紀中期より徳見家の屋敷が所在していたことが知られる。徳見家は中国貿易用の俵物を主に取り扱い、長崎有数の商家であった。町屋の遺構とともも

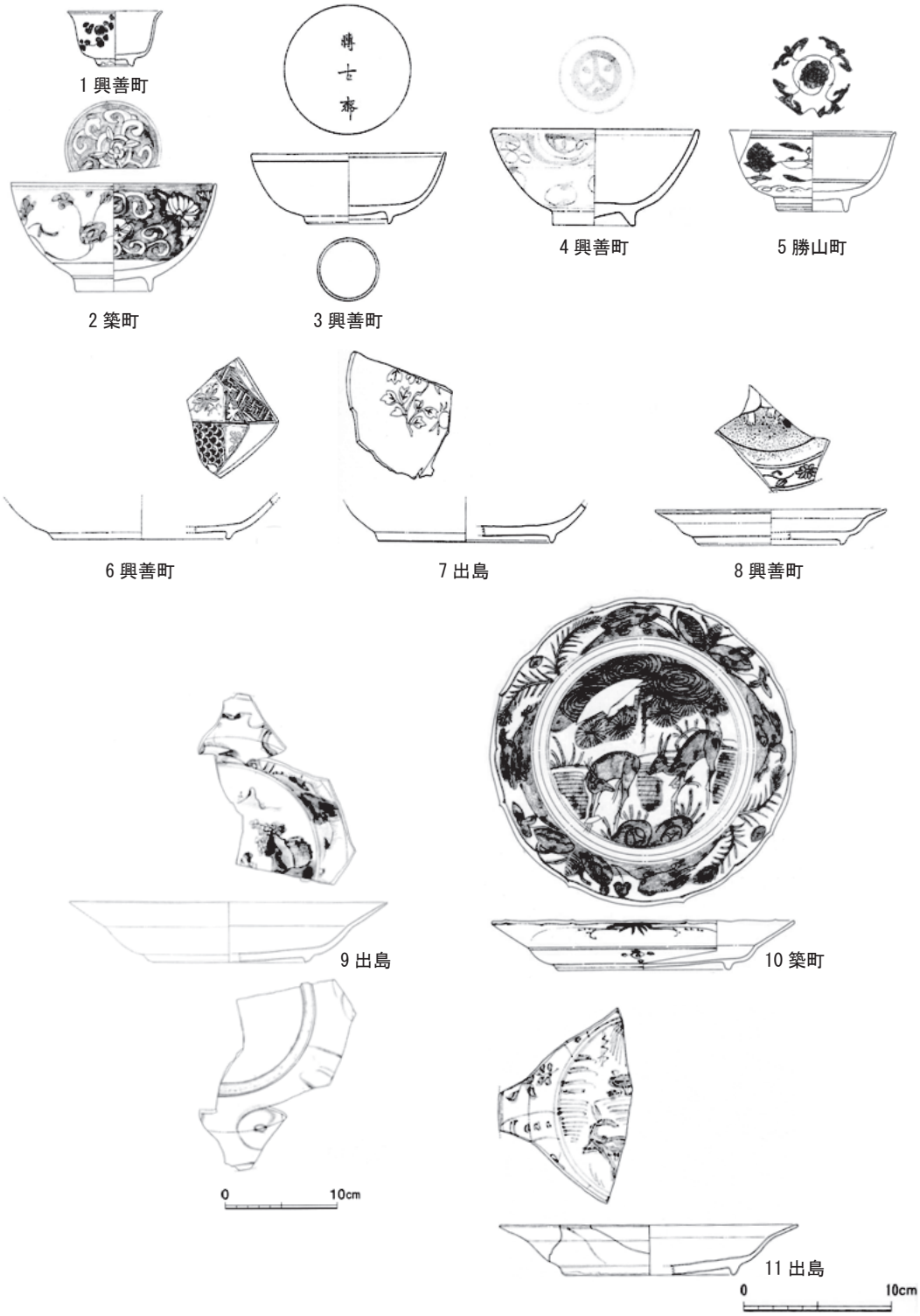


図 5　江戸出土品と類似する長崎出土中国陶磁（1）

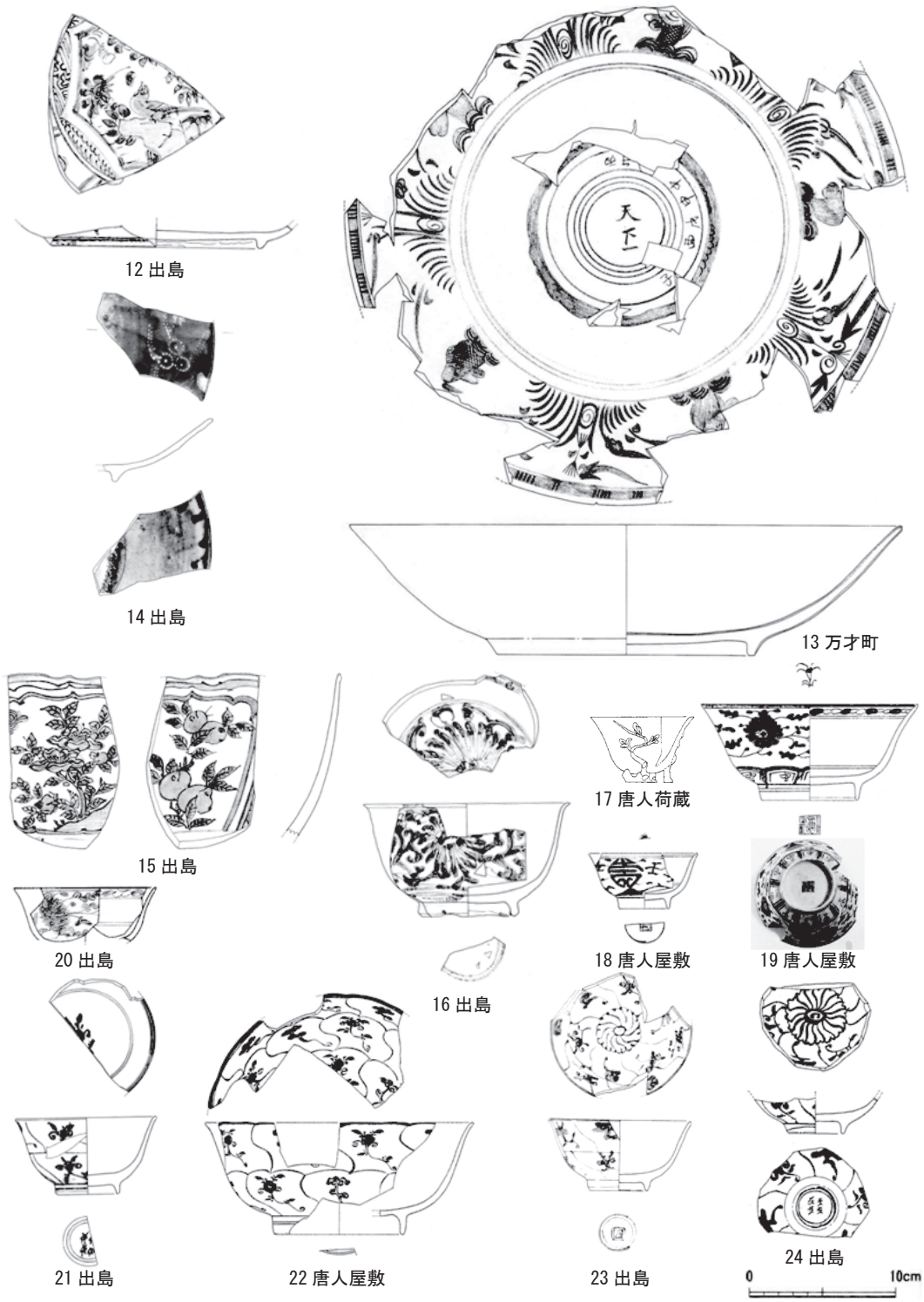


図 6　江戸出土品と類似する長崎出土中国陶磁 (2)

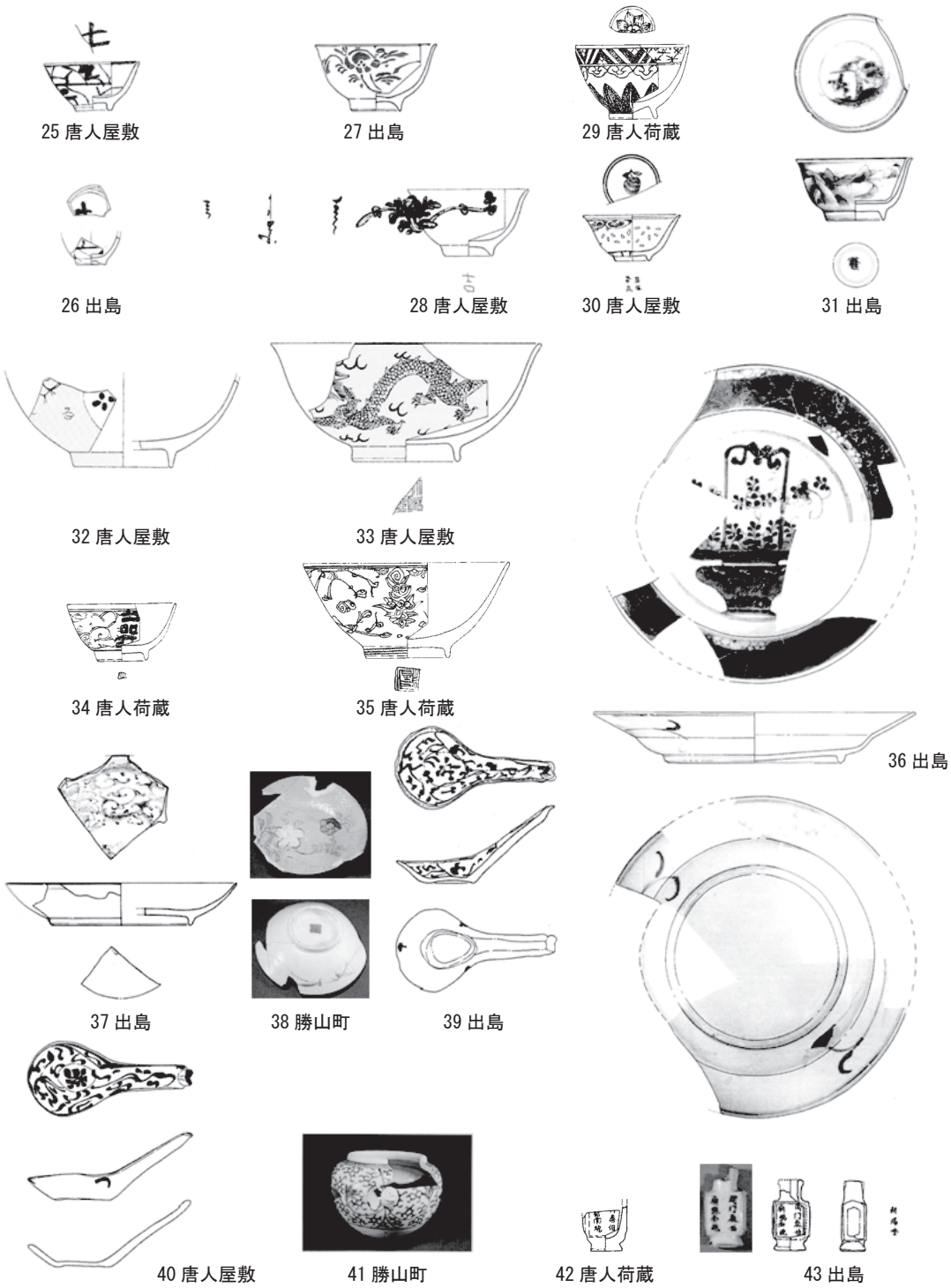


図 7　江戸出土品と類似する長崎出土中国陶磁 (3)

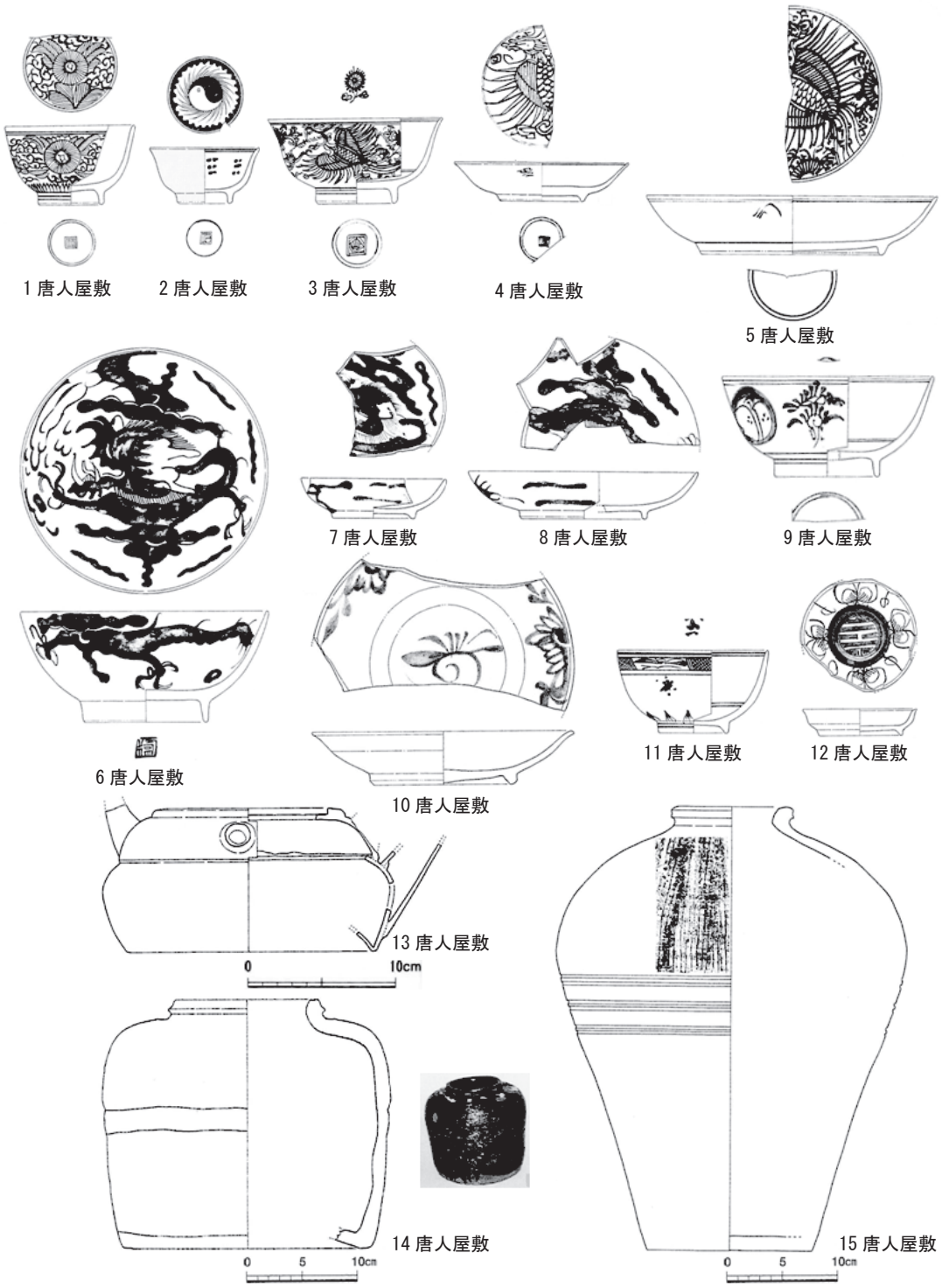


図 8　長崎出土中国陶磁 (1)

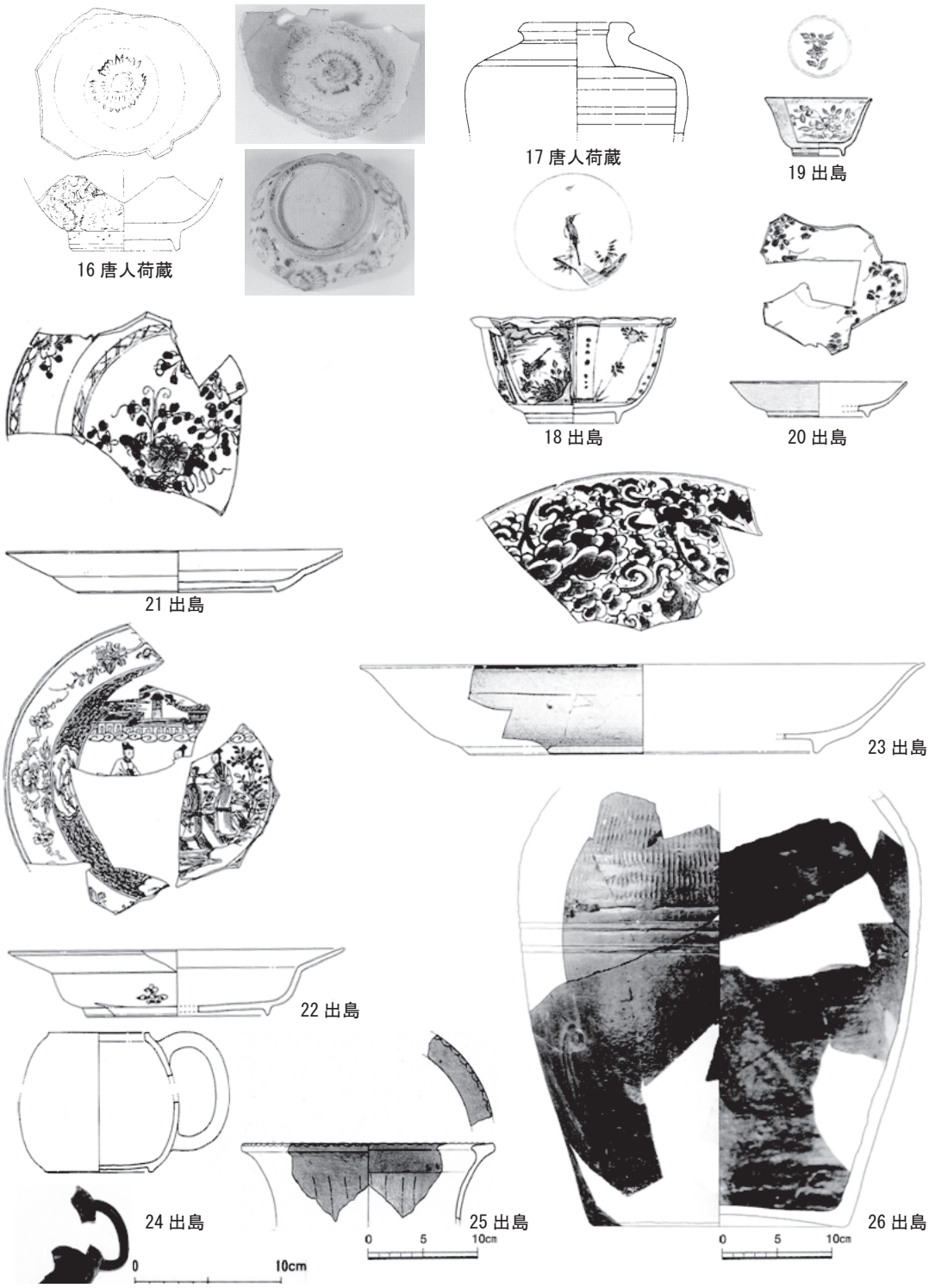


図 9　長崎出土中国陶磁 (10)

表 3　長崎出土中国磁器

No.	遺跡	遺跡の性格	出土遺構	器種	施釉	推定生産地	推定生産年代	備考
1	唐人屋敷跡	中国	1区1層	小碗	青花	景徳鎮	18c	銘
2	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	碗	青磁・青花	景徳鎮	18c中葉	角銘
3	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	碗	青花	景徳鎮	18c中葉	角銘
4	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	皿	青花	景徳鎮か福建・広東	18c中葉	角銘
5	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	皿	青花	景徳鎮か福建・広東	18c中葉	
6	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	大碗	青花	福建・広東	18c中葉	角銘
7	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	皿	青花	福建・広東	18c中葉	
8	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	皿	青花	中国	18c中葉	
9	唐人屋敷跡	中国	1区1層	大碗	青花	福建	18c	
10	唐人屋敷跡	中国	4区瓦礫2層	皿	青花	福建	18c	
11	唐人屋敷跡	中国	1区1層	碗	青花	徳化	18c	
12	唐人屋敷跡	中国	3区石垣裏込め	小皿	色絵	徳化	18c末～19c中葉	
13	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	土瓶	陶器	宜興	18c中葉	
14	唐人屋敷跡	中国	3層	壺	褐釉	中国	18～19c	
15	唐人屋敷跡	中国	3層	壺	緑褐釉	中国	18～19c	
16	新地唐人荷蔵跡	中国	列石下	碗	青花	福建・広東	17c末	印青花
17	新地唐人荷蔵跡	中国	石垣外	壺	白磁	福建	16c後葉～17c前半	
18	出島カピタン別荘跡	オランダ	黒緑	碗	青花	景徳鎮	17c前半	芙蓉手
19	出島西側建造物跡	オランダ	3号土坑	小碗	褐釉・青花	景徳鎮	17c末～18c前半	バタビアン・ウェア
20	出島西側建造物跡	オランダ	3号土坑	皿	褐釉・青花	景徳鎮	17c末～18c前半	バタビアン・ウェア
21	出島南側護岸石垣	オランダ	瓦上層攪乱	皿	青花	景徳鎮	18c前半～中葉	
22	出島西側建造物跡	オランダ	T5	深皿	青花	景徳鎮	17c末～18c前半	
23	出島道路	オランダ	1号土坑	大皿	青花	景徳鎮	18c前半	
24	出島西側建造物跡	オランダ	2号土坑	手付水注	陶器	宜興	清朝期	刻印
25	出島カピタン部屋跡	オランダ	EE外・アマカワ遺構	植木鉢	緑釉	中国南部	清朝期	
26	出島カピタン部屋跡	オランダ	W・表土、1層	壺	緑褐釉	中国	清朝期	

に、江戸時代の商人の生活を示す資料が出土した。

・金屋町遺跡（長崎市教育委員会 2002a）

17 世紀初め頃に今町として町建てされた内町の一つ。長崎港を望む高台に位置する。江戸時代を通じて周辺には諸役所が設けられ、手工業者などでにぎわった。江戸時代の町屋の遺構を検出、7 万点の遺物が確認された。

・勝山町遺跡（長崎市教育委員会 2003a）

1609 年から 1614 年までサント・ドミンゴ教会が建てられており、その破却後には朱印船貿易家で長崎代官となった末次平蔵が領有し、1676 年以降は長崎代官高木家が代々引き継いだ。長崎代官時代の遺物は、大量の日常生活用品とともに高級食器やヨーロッパからの舶来食器が出土している。

・長崎奉行所（立山役所）跡（長崎県教育委員会 2005）

長崎奉行所は 1673 年に置かれ、海禁政策下において外交・貿易や西国大名の監視などに重要な役割を果たした。町屋と比較しても平均的な陶磁器が多く出土しているが、貿易陶磁がいずれの時期も一定量含まれる点に特色があると報じられている。

表 2　江戸出土品と類似する長崎出土中国陶磁

No.	遺跡	遺跡の性格	出土遺構	器種	施釉	推定生産地	推定生産年代	備考
1	興善町遺跡	唐通事会所	SE106	小坏	青花	景徳鎮	16c末～17c初	
2	築町遺跡	町地	2区12号土坑	碗	青花	景徳鎮	1590～1610年代	
3	興善町遺跡	唐通事会所	SK126	皿	青花	景徳鎮	1610～40年代	「博古斎」
4	興善町遺跡	唐通事会所	SK126	碗	青花	漳州	1570～1610年代	
5	勝山町遺跡	町地	1区井戸9	碗	青花	景徳鎮	16c末～17c前半	
6	興善町遺跡	唐通事会所	SK1026	皿	色絵	景徳鎮	1620～40年代	色絵祥瑞
7	出島南側護岸石垣	オランダ	表土・攪乱	皿	白磁	中国		
8	興善町遺跡	唐通事会所	SK126	皿	青花	景徳鎮	1610～30年代	吹き墨
9	出島カピタン部屋跡	オランダ	E外・土坑30	皿	青花	景徳鎮	17c前半	
10	築町遺跡	町地	2区12号土坑	皿	青花	景徳鎮	1590～1610年代	
11	出島乙名部屋跡	オランダ	w・3c層	皿	青花	景徳鎮	1600～1640年代	芙蓉手
12	出島カピタン部屋跡	オランダ	EE外・土坑30下層	皿	青花	景徳鎮	1620～1640年代	芙蓉手
13	万才町遺跡	町地	4号土坑ほか	大皿	色絵	漳州	1590～1630年代	「天下一」 呉州赤絵
14	出島乙名部屋跡	オランダ	E・石垣裏	皿	藍釉	漳州	17c前半	餅花手
15	出島乙名部屋跡	オランダ	W・2層	鉢	青花	景徳鎮	1600～1630年代	芙蓉手
16	出島拝礼筆者蘭人部屋跡	オランダ	跡・瓦溜り	碗	青花	景徳鎮	17c後半～18c初	
17	新地唐人荷蔵跡	中国	石垣外	小坏	白磁	徳化	17～18c	
18	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	小碗	青花	景徳鎮	18c中葉	銘
19	唐人屋敷跡	中国	2層	碗	青花	中国	19c中葉	「大清嘉慶年製」
20	出島乙名部屋跡	オランダ	W・土坑54	小碗	青花	中国	18c末～19c中葉	
21	出島南側護岸石垣	オランダ	前面12区	碗	青花	景徳鎮か 福建	19c前半～中葉	虫銘
22	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	大碗	青花	景徳鎮	18c中葉	
23	出島カピタン部屋跡	オランダ	E・近代土坑攪乱	碗	青花	中国	18c末～19c前半	角福
24	出島南側護岸石垣	オランダ	石垣前	小碗	青花	景徳鎮か 福建	18c末～19c前半	銘
25	唐人屋敷跡	中国	4区瓦礫2層	小坏	青花	中国	19c前半～中葉	
26	出島乙名部屋跡	オランダ	E・表土	小坏	青花	中国	18c後半～19c	
27	出島カピタン別荘跡	オランダ	土G下	碗	色絵	徳化	18c後半～19c前半	
28	唐人屋敷跡	中国	2層	小碗	色絵	徳化	19c中葉	「吉」
29	新地唐人荷蔵跡	中国	石垣外	小坏	青花	中国か	19c	
30	唐人屋敷跡	中国	3区石垣裏込め	小坏	青花	景徳鎮	19c	「若深珍蔵」 蛍手
31	出島三番蔵跡	オランダ	1層	小坏	青花	景徳鎮	17～18c初	「琳玉堂製」
32	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	大碗	瑠璃釉	景徳鎮	18c中葉	「大清乾隆年製」 金彩
33	唐人屋敷跡	中国	1号堀3層	碗	色絵	景徳鎮	18c中葉	金彩
34	新地唐人荷蔵跡	中国	石垣外	小坏	青花	景徳鎮	19c初～中葉	銘
35	新地唐人荷蔵跡	中国	石垣外	碗	青花	景徳鎮	18c後半～19c前半	銘
36	出島道路	オランダ	1号土坑	皿	青花	景徳鎮	18c前半	
37	出島拝礼筆者蘭人部屋跡	オランダ	外・6号土坑	皿	青花	景徳鎮	18c後半～19c初	
38	勝山町遺跡	町地	3区土坑6	皿	色絵	景徳鎮	18c末～19c前半	銘
39	出島西側護岸石垣	オランダ	石垣前	散蓮華	青花	福建	18c末～19c中葉	
40	唐人屋敷跡	中国	4区瓦礫2層	散蓮華	青花	中国	19c	
41	勝山町遺跡	町地	3区土坑3	鳥餌入	青花	中国	18c末～19c前半	
42	新地唐人荷蔵跡	中国	石垣外	小瓶	青花	中国	18c	
43	出島南側護岸石垣	オランダ	石垣前	小瓶	青花	景徳鎮か 福建	18c後半～19c	「闇門泰伯廟橋南堺」 「朝陽堂」

4　考察

前章で示した江戸と長崎出土の中国陶磁の比較から言えることを整理したい。

江戸時代の中国陶磁の国内における出土状況をまとめた鈴木氏によると、17 世紀末から 18 世紀

初頭を境にして、大きく二分できるという。前半は、出土する量は激減してゆくものの、器種構成を見れば主要製品は碗･皿にある。空白期をはさんでの後半は、量的には少ないままが続くものの、器種構成では小坏が中心となり、他に筆立て・鳥の餌入れ・植木鉢などの趣味・園芸用具が見られる（鈴木 1999）。

また堀内氏は江戸遺跡から出土した清朝磁器を紹介した中で、出土傾向として以下の点を指摘した。

・碗・小坏など特定の器種に集中している。

・器形・文様・法量に規格性が認められる。

・18 世紀末以降急増する。

・大名屋敷だけではなく中・下級武士の居住していた地域からも出土する。

・色絵の割合が大きい。

特に、紹介された資料 213 点のうち、碗・小坏が 159 点と 4 分の 3 を占め、特異な組成であると言える。生産地については景徳鎮窯系が 175 点、福建・広東系が 14 点、徳化窯系が 24 点と、8 割以上が景徳鎮窯系の製品で占められることが特徴的である。

これも考慮し、江戸と比べた場合に、長崎出土の中国陶磁の特徴としては以下の点が注目される。

・江戸の出土品と共通するものが存在する。

・福建・広東系の製品も多い。

・碗・小坏以外の器種も多い。

本章ではこの特徴が表れる背景について考察する。

１）江戸と長崎の共通

前章で示したように、江戸と長崎の出土品では共通したものがかなりある。唐人屋敷跡・新地唐人荷蔵跡･出島和蘭商館跡･長崎市中の各地で、江戸でも見られるものが出土した。17 世紀中葉（明末清初）ではいわゆる芙蓉手・呉州赤絵・餅花手・祥瑞手の皿や鉢などがある。18 世紀から 19 世紀を中心とした時期には仙芝祝寿文や花唐草文の青花碗、草花文の色絵小坏などが多い。江戸で見られるものの生産地は景徳鎮、徳化、福建・広東、宜興である。器種は碗・小坏・皿・散蓮華・鉢・花生・蓋・小瓶の他に、土瓶・餌入れ・瓶・合子・盃洗がある。また施釉法には青花・色絵・白磁・瑠璃釉がある。これら江戸で見られる個々の属性は長崎でも見られるものである。この結果を見ると、江戸で見られる中国陶磁の大部分は長崎を通して入ってきた可能性があると見なすことができるであろう。

輸入品の流通については、江戸後期の輸入品流通経路についての中村質氏作成図を示す（図 10）。中国船・オランダ船が運んできた品物は、長崎会所を経由したのち落札商人から京・大坂問屋に送られ全国市場にのるのがメインの流通ルートであった（瀬野他 1998）。このメインルート以外に、中国の冊封を受けて朝貢貿易を行う琉球を通した輸入品の流れも存在した。堀内氏は、江戸

時代に輸入された中国陶磁には、長崎を経由するルートと沖縄を経由するルートが存在したと指摘している（堀内 1999)。沖縄本島をはじめとして南西諸島の遺跡から、印青花など中国南部と推定される磁器を中心に出土している。九州南部でもわずかながら同様の製品の出土が見られる（橋口 1999)。

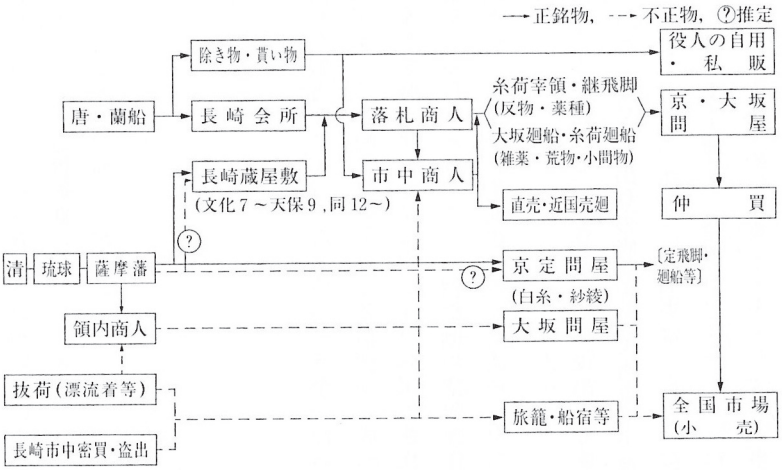


図 10　江戸後期の輸入品の流通経路（長崎県文化団体協議会 1989 より）

沖縄から出土する 17 世紀から 19 世紀の貿易陶磁器を紹介した新垣力氏によると、当該期の遺跡から出土する貿易陶磁は中国産が圧倒的多数を占めるという。産地別に見ると、多い順に徳化窯系、福建・広東系、景徳鎮窯系、漳州窯系、その他の製品がある（新垣 2010)。長崎で出土する製品と共通のものもある程度見られるものの、徳化窯や福建・広東系の製品が景徳鎮窯系よりも多いという点など、長崎とは異なった様相がうかがえる（図 11)。堀内氏は江戸をはじめ本州の各消費地遺跡からは景徳鎮窯系の製品が多く見られることを指摘しており、このことからは、日本の大方の地域では長崎ルートが主たる貿易陶磁の流入経路であると考えることができるだろう。

2）江戸と長崎の様相差 — 中国陶磁の生産地組成

次に、江戸と比べて長崎で福建・広東産の製品が多く出土するという点について検討する。

漳州窯・徳化窯を除いた福建・広東産の製品が江戸で出土した例は少なく、堀内氏の清朝磁器の集成では青花の碗・小坏が出土する程度である。高台無釉で蛇の目高台風の畳付をフラットに調整した粗雑な作りの一群（図 3-26・27）などがある。19 世紀第 2 四半期から現れる。

17 世紀中葉以降に使用されたと考えられる中国陶磁が一定以上出土した長崎の遺跡について、報告書に掲載された陶磁器の生産地と器種を一覧にした（表 4)。長崎で出土した福建・広東産の製品は量が多く種類も豊富である。長崎出土の福建･広東産の陶磁器の様相を、扇浦氏の研究によって確認する（扇浦 1999)。

・小坏・碗・皿・鉢・散蓮華などの器種がある。

・青花が中心で、色絵や青磁などはほとんど見当たらない。

・文様は草花や仙芝祝寿が見られるが、景徳鎮窯に比べるとやや粗雑である。

他にも江戸では見られない意匠のものが多くある。江戸で出土が確認されたものはこれらのほん

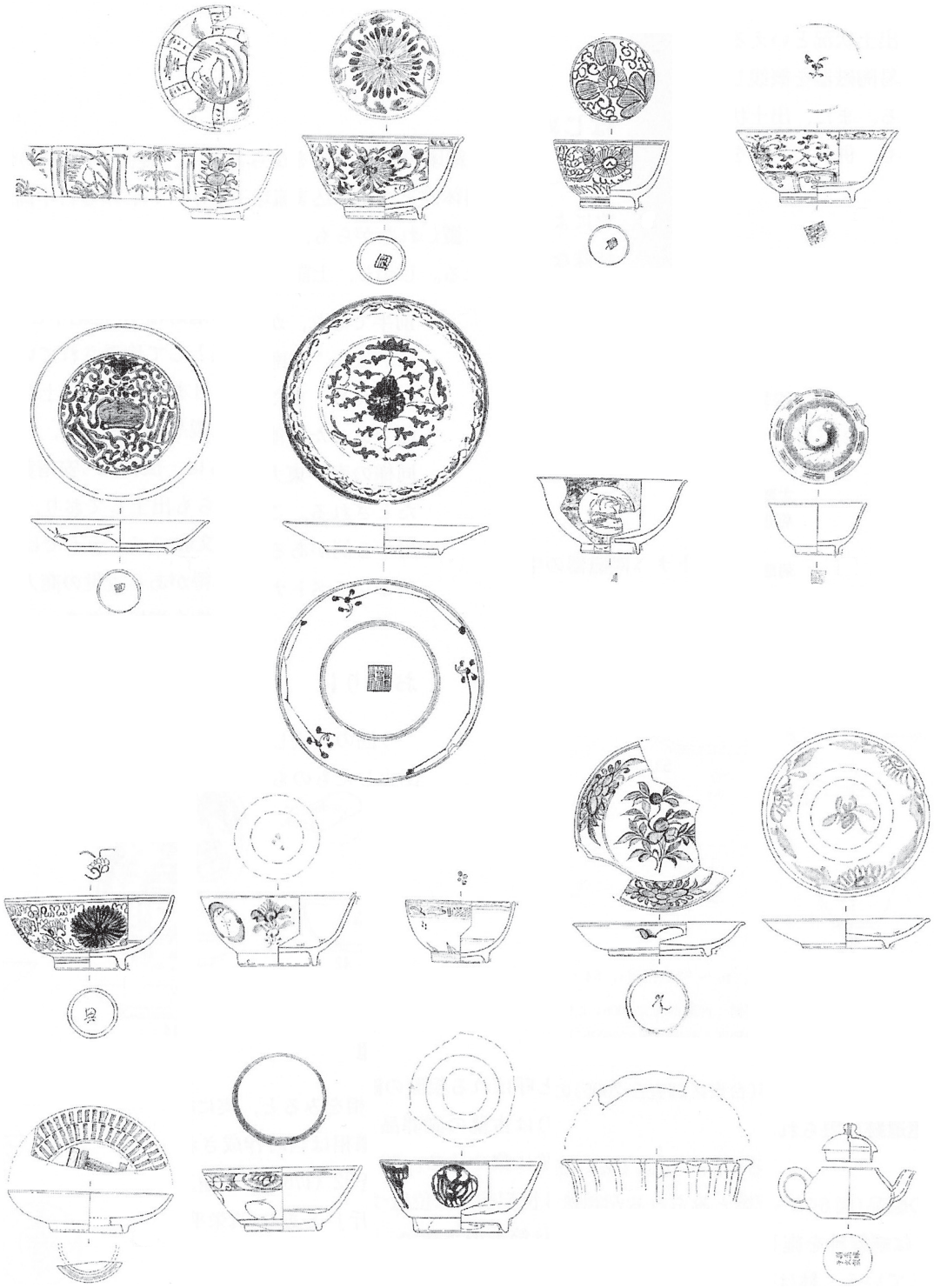


図 11　沖縄出土中国陶磁（新垣 2010 より抜粋）

表 4　長崎出土陶磁器生産地別器種

	景徳鎮	漳州	福建・広東	徳化	宜興	その他・不明
唐人屋敷跡	碗、小碗、大碗、皿、鉢、小坏、足付坏、盃台、蓋物		碗、小碗、大碗、皿、鉢、大鉢、小坏、水注	碗、小碗、皿、小皿、小坏、急須蓋、散蓮華	碗、急須蓋、散蓮華、水注、土瓶	碗、小碗、大碗、碗蓋、皿、鉢、小坏、火入れ、瓶、蓋物蓋、壺、小壺、甕、合子、散蓮華、溲瓶、灯火具、湯罐蓋
新地唐人荷蔵跡	碗、小碗、碗蓋、皿、小皿、深鉢、小坏、器台		碗、皿、大鉢、壺	小皿、小坏		皿、大鉢、小坏、瓶、小瓶、壺、散蓮華
出島和蘭商館跡	碗、小碗、手付碗、碗蓋、皿、小皿、大皿、深皿、深大皿、鉢、小鉢、小坏、手付坏、瓶、小瓶、蓋物、蓋物蓋、壺、薬合子蓋、水注、手付水注	碗、皿、大皿、鉢	碗、大碗、皿、大皿、鉢、大鉢、壺、散蓮華	碗、小碗、皿、小瓶、散蓮華	急須、急須蓋、手付水注	碗、小碗、皿、大皿、鉢、大鉢、小坏、瓶、小瓶、把手付瓶、蓋物、蓋物蓋、壺、耳付壺、甕、合子蓋、散蓮華、植木鉢、片口、水注、灯火皿、面子、中蓋、座椅子
築町遺跡	碗、小碗、碗蓋、皿、鉢、小鉢、小坏、香炉、瓶、小壺、合子蓋、中蓋	皿、大皿、鉢	碗、小碗、皿、鉢、小坏、壺、小壺、線香立	碗、皿、人形	急須、急須蓋、	碗、瓶、小瓶、壺、小壺、甕、合子、散蓮華、植木鉢、盤
興善町遺跡	碗、小碗、碗蓋、皿、小皿、小坏、蓋物、合子蓋	碗、皿、大皿、鉢、合子	碗、皿、小坏	小碗、小坏、散蓮華、人形	散蓮華、涼炉敷、蓋	皿、鉢、注口付壺、蓋
金屋町遺跡	碗、鉢、瓶		深皿	人形		碗、皿、小坏、壺、散蓮華
勝山町遺跡	碗、小碗、碗蓋、皿、小皿、鉢、小坏、瓶、段重、壺、水滴、鳥餌入れ	皿	大碗		小皿、小鉢、急須	小碗、皿、小皿、深鉢、小坏、小瓶、散蓮華、植木鉢、鳥餌入れ、湯罐、蝋燭立

表 5　江戸出土陶磁器生産地別器種（堀内 1999 より作成、17 世紀第 4 四半期以降）

	景徳鎮	福建・広東	徳化	宜興
江戸	碗、小坏、皿、鉢、瓶、薬瓶、合子、散蓮華、花生、土瓶、鳥餌入れ、盃洗、蓋	碗・小坏、散蓮華	碗・小坏	急須

の一部であることがわかる（表 5）。

次に、長崎に入ってきた中国陶磁の由来について考えるために、長崎陶磁貿易に関係した船・出航地と商人について見てみる。

中国船は、江戸前期には中国や東南アジアから長崎へ来航した。中国船は出航地の遠近により、口船（浙江省・江蘇省出航）、中奥船（福建省・広東省出航）、奥船（東南アジア出航）に区別された。廖赤陽氏によると、明末の 1640 年代から清朝の台湾統一の 1680 年代まで、福建からの船が圧倒的に多かった。江戸後期になると出航地は江浙地方に限定されたが、福建商人も江浙商人に雇われて、またはそれに付随して個人資本で貿易に従事していたという（廖 1999）。陶磁器の産地を見ると、江浙地方から積み出されることも多い景徳鎮産の製品がかなりの部分を占めるが、長崎に来航した中国人に福建省出身者が多かったことが関係して、唐人屋敷跡を中心に福建・広東産の陶磁器の出土も多いのであろう。

出島で出土した中国陶磁についても考えてみたい。オランダ東インド会社は、出島に商館を構え

る以前から、東アジアでは台湾に拠点を持ち、中国の品々の輸出を手がけていた（図 12）。出島で出土する江戸前期の芙蓉手・呉州手の皿・鉢が江戸でも多く見られることは、会社が日本向けに中国陶磁を運ぶ貿易を手がけていたことの傍証になる。会社が 1662 年に台湾から撤退した後は、長崎に来航する船はインドネシアのバタビアからのものが中心になった（八百 1998）。会社はバタビアに来航した中国商人を通して中国産の陶磁器を入手しヨーロッパ方面へ送っていた。出島では日本に中国陶磁の流通が少ない時期にも一定量の廃棄があり、日本では見られないヨーロッパ向けと思われるデザインのものも多い。このことから、出島で出土する中国陶磁には東インド会社がバタビアで入手したものもかなりあると考えられる。加えて唐人屋敷跡や長崎市中・江戸と共通するものも見られるが、日本国外で入手して日本に持ち込んだものか、長崎で日本人や中国人との接触により入手したものかを判断するのは難しい。

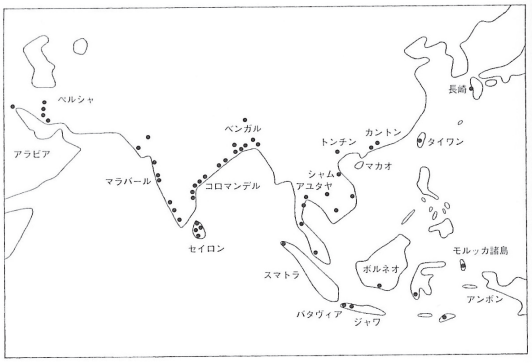


図 12　オランダ東インド会社の拠点と交易圏（山口 2008 より）

ここで貿易の制度について補足しておく。江戸時代前期に日本の貿易体制は限定的なものになったが、中国・オランダとの貿易額は増加した。幕府は、国内の銀産出が減少したため貿易額を制限する政策をとるようになり、1715 年の正徳新令では長崎貿易を毎年中国船 30 隻・銀 6000 貫、オランダ船 2 隻・銀 3000 貫までとした。その後も輸出用の銅や俵物の不足は慢性的に続き、船数・定高は減少傾向にあった。

オランダの場合は会社の公式な取引（本方貿易）の他に商館員の個人的な取引（脇荷貿易）も行われ、これもオランダ貿易の重要な要素であった。オランダ商館長が江戸参府の際に舶載品を幕府要人への贈り物としていたこともあったという。オランダ東インド会社の貿易についてはさまざまな種類の記録が残されているが、脇荷貿易については記されておらず、全容は明らかではない（小林編 2002）。

不明な点はあるにせよ、おおまかな傾向として、長崎陶磁貿易において重要な役割を果たしたのは福建省出身者を多く含む中国商人だったと判断してよいだろう。福建・広東産の陶磁器は彼らの生活と密接に結びついた形で長崎に持ち込まれたものと考えられる。

3）江戸と長崎の様相差 — 中国陶磁の器種組成

福建・広東産のものに限らず、長崎で出土した中国陶磁は、江戸遺跡出土の中国陶磁と比べて器種のバリエーションが豊富である。江戸においては器種の偏在が見られ、江戸での需要が特殊なものであったととらえることができる。具体的には江戸では清朝磁器は碗・小坏などの器種に集中しており、製品の器形・文様・法量に規格性が見られる。堀内氏は碗・小坏の器形的・法量的な特徴

からこれらが「飲む」ための道具として用いられたと考え、江戸での需要について「18 世紀後半以降に、煎茶器など文人アイテムとして」のものだとしている（堀内 1999，2010 など）。一方で、長崎ではそれ以外の器種も多く見られる。食膳具に限らず、貯蔵運搬用具や生活用具も出土する。江戸と長崎で出土した中国磁器の器種の面での様相差は何によるものなのかをさらに探るため、清朝磁器の受容のされ方の違いを考えてみたい。

前述のように、江戸では清朝磁器は主に煎茶道具として使われたと考えられる。長崎では食器全般が使われたようで、清朝磁器の用途は煎茶用に限られなかったようである。大ぶりの碗や鉢・皿・散蓮華も比較的多く、異なる器種で揃いの図柄が見られることからも、清朝磁器は長崎には一連の食器として入ってきたといえる。この中から碗を中心とした器種が選択されて江戸まで運ばれたのだと考えることもできる。

他に江戸で出土が少ない中国陶磁として、壺・甕などの貯蔵運搬容器がある。唐人屋敷跡で大量に出土した褐釉や褐緑釉の壺は、酒などの液体を搬入する際の容器として唐人屋敷内に運び込まれたことが絵画資料から推測される（長崎市教育委員会 2001b）。これらに代表される大型の貯蔵運搬容器は長崎市中でも見られる。中に入れられているものの需要が江戸において少なかったか、流通過程で小分けにされて売られたということが想定される。これと対照的なのは薬瓶である。新地唐人荷蔵跡・出島・長崎市中と、江戸でも確認された。内容物の需要に伴い、容器として流通した例である。

４）様相差の背景

輸入品の主要な経由地である長崎で多く見られる福建・広東産の陶磁器の出土が江戸で少ないことや、江戸で出土した中国陶磁が極めて偏った器種構成であることは、長崎に入ってきた陶磁器の中から選ばれたものが江戸に流通したことを示す。この選択はどのような意識が働いた結果なのか、考えてみたい。

前述のように肥前産の磁器が大量に国内に流通しだすのが 1640 年代とされ、これを機に中国陶磁の流通量は激減する。17 世紀中葉には江戸でも肥前産磁器が出回っており、この時期以降に江戸まで運ばれる中国磁器は、肥前磁器普及以前の生活用品としての需要とは違った需要によるものだった可能性がある。安価な磁器としての肥前産磁器に対し、中国産陶磁器は嗜好品という位置づけだったと考えることもできるだろう。鈴木氏も、国内に陶磁器が普及していた状況下で清朝磁器が輸入された理由として、「ブランド指向、高級指向」があったことを指摘している（鈴木 1999）[2)]。上質な景徳鎮窯の磁器や、煎茶器として使われる徳化窯の小坏などと比べると、福建・広東産とされる陶磁器は特にこの指向による需要が生じることがなく、そのために江戸まで運ばれることが少なかったのだと考えられる。

また江戸で出土した器種を見ると、中国陶磁の価値は煎茶など中国趣味の道具として用いることに置かれたと判断してよさそうである。強い規格性が認められる中国陶磁は、煎茶器などとして定

番商品となったものと推定される。

長崎ではこれ以外の多様な器種が出土し、福建・広東産のものも多い。長崎には江戸での需要に応えた商品以外のものも多く流入したということである。長崎で中国陶磁に対して与えられた価値は、江戸において意識された上質な製品、または煎茶道具としての価値に限定されなかったと考えることも可能である。

江戸に流通するよりも幅広い種類の中国陶磁が認められることからは、長崎には特に江戸の需要が意識されて中国陶磁が運び込まれたわけではないということが想定される。この点が、貿易陶磁の流通という観点から長崎と江戸を比較した際に重要な特徴として指摘できるだろう。

５　おわりに

長崎を通した中国陶磁貿易について見てきた。江戸と長崎出土の中国陶磁の分析を通して、江戸時代、長崎から江戸へ至る中国陶磁の流れがあったこと、長崎は日本への中国陶磁流入の主要な窓口であったこと、長崎には江戸に流通するもの以外にも幅広い種類の品物が入ってきたことが明らかになった。

長崎と江戸で出土した中国陶磁の分析では、遺物そのものが同じかどうかと生産地・器種の比較に主眼をおいたため、分析に含めることのできなかった要素も多い。また今回は対象の都市を長崎と江戸としたため、輸入陶磁器の流れについては少なくとも長崎に入る時点では選別がなされなかったということが言えるのみである。長崎を出る際に選別されたのか、江戸に入る際に選別されたのか、他の中間地点で選別にかけられたのかに言及することはできなかった。この点は今後の課題としたい。

謝辞

本稿を書くにあたり、扇浦正義氏、佐々田学氏、山口美由紀氏、杉本茂喜氏をはじめとする長崎市の方々や川口洋平氏には大変お世話になり貴重なご教示もいただきました。また堀内秀樹先生、東京大学埋蔵文化財調査室の皆様には常日頃よりお世話になっています。記して感謝を申し上げます。

注

１）バタビアン・ウェアは景徳鎮からバタビアに大量に出荷されたことにちなむ呼称である。

２）ただし幅広い階層を含む武家地や、町人地、寺社地から出土することから、大部分の貿易陶磁は江戸の人々の日常生活にある程度取り込まれていたと思われる。鈴木氏は、出土する貿易陶磁の検出状況、品質・器種などを鑑み、貴重品的な性格ではなく、もっと実用的なものだったとしている（鈴木 1991）。

引用・参考文献

新垣 力　2010 「沖縄から出土する 17 ～ 19 世紀の貿易陶磁器」『海の道と考古学』高志書院，203-217

江戸遺跡研究会　2001 『図説江戸考古学研究事典』柏書房

扇浦正義　1994 「長崎港市における近世輸入陶磁の様相」『長崎県の考古学』:67-77

扇浦正義　1999 「長崎出土の清朝陶磁」『貿易陶磁研究』19:23-37

川口洋平　2007 『世界航路へ誘う港市：長崎・平戸』新泉社

川口洋平　2012 「『長崎奉行』の考古学：江戸と長崎の発掘成果の比較から」『考古学ジャーナル』623:30-33

近世貿易陶磁器調査・研究グループ　2013 『近世都市江戸の貿易陶磁器資料集（1）』

京葉線八丁堀遺跡調査会　1990 『京葉線八丁堀遺跡』

小林克編　2002 『掘り出された都市：日蘭出土資料の比較から』日外アソシエーツ

鈴木裕子　1991 「海外との交流：江戸遺跡と貿易陶磁」『甦る江戸』新人物往来社，233-256

鈴木裕子　1999 「清朝陶磁の国内の出土状況：組成を中心に」『貿易陶磁研究』19:38-47

瀬野精一郎・新川登亀男・佐伯弘次・五野井隆史・小宮木代良　1998 『長崎県の歴史』山川出版社

千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会　1997 『千駄ヶ谷五丁目遺跡』

東京大学遺跡調査室　1990 『医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1990 『山上会館・御殿下記念館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』

長崎県教育委員会　2005 『長崎奉行所（立山役所）跡・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡』

長崎県文化団体協議会　1989 『中国文化と長崎県』長崎県教育委員会

長崎市教育委員会　1986 『国指定史跡出島和蘭商館跡』

長崎市教育委員会　1996a 『新地唐人荷蔵跡』

長崎市教育委員会　1996b 『万才町遺跡』

長崎市教育委員会　1997 『築町遺跡』

長崎市教育委員会　1999 『興善町遺跡』

長崎市教育委員会　2000 『国指定史跡出島和蘭商館跡』

長崎市教育委員会　2001a 『国指定史跡出島和蘭商館跡』

長崎市教育委員会　2001b 『唐人屋敷跡』

長崎市教育委員会　2002a 『金屋町遺跡』

長崎市教育委員会　2002b 『国指定史跡出島和蘭商館跡』

長崎市教育委員会　2003a 『勝山町遺跡』

長崎市教育委員会　2003b 『国指定史跡出島和蘭商館跡』

長崎市教育委員会　2003c 『唐人屋敷跡』

長崎市教育委員会　2007 『興善町遺跡』

長崎市教育委員会　2008 『国指定史跡出島和蘭商館跡』

長崎市教育委員会　2010 『国指定史跡出島和蘭商館跡』

長佐古真也　2013 「江戸遺跡出土の清朝陶磁について：頻出類型を中心に」『近世都市江戸の貿易陶磁器』第 34 回貿易陶磁研究会研究集会発表要旨，173-182

日本橋一丁目遺跡調査会　2003 『日本橋一丁目遺跡』

日本貿易陶磁研究会　2013 『近世都市江戸の貿易陶磁器』第 34 回貿易陶磁研究会研究集会発表要旨

橋口亘　1999 「薩摩出土の清朝磁器：琉球口唐物の日本本土流入」『貿易陶磁研究』19:141-146

堀内秀樹　1991 「東京都江戸遺跡出土の明末清初の陶磁器」『貿易陶磁研究』11:185-200

堀内秀樹・坂野貞子　1996 「江戸遺跡出土の 18・19 世紀の輸入陶磁」『東京考古』14:99-118

堀内秀樹　1999 「江戸遺跡出土の清朝陶磁」『貿易陶磁研究』19:1-22

堀内秀樹　2006 「大名藩邸で使用された陶磁器と御殿内の生活」『江戸の大名屋敷』江戸遺跡研究会，129-147

堀内秀樹　2010 「近世都市江戸における貿易陶磁器の消費：需要とその背景」『海の道と考古学』高志書院，248-265

八百啓介　1998 『近世オランダ貿易と鎖国』吉川弘文館

山口美由紀　2008 『長崎出島』同成社

廖赤陽　1999 「華商のネットワークと長崎陶磁貿易」『貿易陶磁研究』19:85-96

The Distribution of Chinaware to Japan in the Edo Period

Minako TSURUMOTO

In the Edo period, during 1641-1859, Japan's diplomacy and trade were restricted. China and the Netherlands were limitedly allowed to trade with Japan in Nagasaki.

In Nagasaki and Edo(Tokyo), many trade ceramics are excavated from remains of the Edo period in common. The most of them are Chinese porcelains. The porcelains are thought to be transported from Nagasaki to Edo. That proves a close bond between Nagasaki and Edo throughout the Edo period.

Nagasaki seems to have been the main entrance of chinaware. Some researchers maintain that chinaware was also imported to Japan via Ryukyu(Okinawa). Ryukyu Kingdom had relationships with both China and Japan. In Ryukyu remains, the rate of excavated porcelains produced in Dehua(徳化) and Fujian(福建)/ Guandong(広東) is high, while that of Jingdezhen(景徳鎮) is higher in Nagasaki. In Edo and other consumer cities in Japan, most of the trade ceramics were the products of Jingdezhen. So it can be said that the majority of trade ceramics was imported to Japan through Nagasaki in those times. Both the Chinese and the Dutch were possible carriers because porcelains that resemble relics of Edo are seen in each area they lived in Nagasaki.

After entered Nagasaki, specific porcelains were selected from various items and transported to Edo. As compared with Nagasaki, only a limited variety of porcelains are seen in Edo. Especially in the latter part of the Edo period, cups made in Jingdezhen account for a very large percentage of trade ceramics in Edo. On the other hand, in Nagasaki, there were many trade ceramics of Fujian/Guandong in addition to Jingdezhen. Other tableware, livingware and containers were also founded. The Chinese concerned to trade and lived in Nagasaki were mostly from Fujian. Chinaware seems to have entered Nagasaki as the series of livingware, attached to their lives. In Edo, people seem to have put values on chinaware as tools for sophisticated cultural behavior, such as tea ceremony. People in Edo probably have needed suitable porcelains, and this may be why more products of Jingdezhen were selected than those of Fujian/Guandong, which were often crude. When chinaware entering Nagasaki, the carriers may not have been so strongly conscious of the demand of people in Edo, for they transported a wide range of items to Nagasaki. Comparing Nagasaki and Edo from the perspective of the distribution of chinaware, this is an important feature.